

米原市内の京極ゆかりの地 ～清瀧寺徳源院～

今年の1月から、この湖北地域と深く関係する大河ドラマ「江～姫たちの戦国」が始まりました。米原市にとっては主人公・江の姉である初が、その後、京極高次(19代)に嫁ぎ、京極氏が大名として明治期まで残る礎となりました。のちに22代目当主の京極高豊は、寛文12年(1672)に領地の一部と引き換えに、京極氏発祥の地、菩提寺徳源院がある清滝(大野木の一部含む)を手に入れました。これを機に高豊は、寺の復興をはかり、三重塔の建立や近隣に散在していた歴代当主の宝篋印塔を集め、順序ごとに整備をしました。それと併せて行われたのが、徳源院の庫裡書院の西に広がる庭園の整備です。

「青竜の庭」とも称されるこの庭は清滝山の山腹を借景とし、それらにつづく自然の地形を利用した谷筋が築山左右(南北)に配し、南側奥には滝石組みがあります。山裾の広い池には2つの岩島も配されています。一見すると、枯滝・枯池となっていますが、もとは山からの水が池へ流れて、水が蓄えられていました。しかしながら、昭和34年の伊勢湾台風の影響で、水路が遮断されてしまい、現在の「枯山水」のような姿になってしまいます。それでもなお、庭

園内に配された南側築山上の雪見灯籠や五輪塔、北岸の山灯籠は、護岸の石組とともに美しさを形成しています。

四季折々によって、その表情は変化していきます。特に秋の紅葉は、庭に植えられたもみじが赤く染まります。やがて、葉が散ると庭一面が、赤い絨毯のように敷き詰められるなど、その変化に全く飽きる事のない庭園です。(梅本 匠)



▲紅葉の庭園

情報BOX

◆米原市教育委員会では、下記のパンフレット類を刊行しました。

『京極氏激闘譜—京極氏の遺跡、信仰、文化—』

※鎌倉時代から戦国時代まで、米原を拠点に北近江を支配した大名・京極氏の明治維新までつなげる歩みを、遺跡や出土品で紹介しています。

『米原市遺跡散策マップ4 東山道(中山道)沿いの遺跡』

『米原市遺跡リーフレット』(23～30)

23番の面遺跡、24法勝寺跡、25三大寺跡、26松尾寺跡、27鎌刃城跡、28太尾山城跡、29箕浦城跡、30長比城跡

『伊吹山の山岳寺院—太平寺跡・弥高寺跡・長尾寺跡—』

※太平寺跡の森林整備に伴い、伊吹山信仰と中心社寺のパンフレットです。

◆滋賀県教育委員会では、米原市教育委員会と協働して下記の埋蔵文化財活用ブックレットを刊行しました。

『靈仙山と松尾寺の文化財』

※信仰の山・靈仙山の歴史と人々とのつながり、山岳寺院松尾寺の発掘調査の成果などを紹介しています。

◆伊吹山文化資料館では、下記のマップを刊行しました。

『春照宿の町並み探検マップ』『藤川宿のまちなみマップ』

※北国脇往還の2つの宿場を紹介しています。

◆◆編集後記◆◆

北近江は大河ドラマの『江 姫たちの戦国』で賑やかです

■浅井氏の居城・小谷城界限には、連日観光バスが詰めかけています■三姉妹の次女・初が京極高次に嫁いでますが、京極氏のふるさと「米原」は、いまのところ静かです■今回は、巻頭に京極氏シンポジウムの内容を紹介しました

■中世から近世まで整然と並ぶ大名墓群は、日本中でここにしかない聖地です■シンポをきっかけに、地に足を付けた調査・研究をおこないたいと思います(シャンギリっ子)

米原市文化財ニュース

佐加太 第33号

発行 平成23年3月25日

編集 米原市教育委員会

〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1

米原市教育委員会生涯学習課歴史・文化財保護室

TEL.0749(55)8020

印刷 はなまる商店



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

シンポジウム報告「まいばらに花開いた 京極氏の信仰と文化」

米原市には、京極氏歴代が眠る清瀧寺徳源院(清滝)があり、中世から近世の歴代当主の宝篋印塔が並ぶ「京極家墓所」は国の史跡に指定されています。3月6日におこなったシンポジウムは、「京極氏の信仰と文化」をテーマに討論をおこないました。以下、中井均氏(長浜城歴史博物館)に報告いただきました—

シンポジウムには基調報告をいただいた3人の報告者に加え、徳源院住職の山口光秀師に加わっていただき、中井がコーディネイターを務めた。まず、山口師により徳源院の成り立ちについて語っていただいた。師は徳源院が京極氏の墓所として営まれた寺院であり、檀家のないことを特長として語られた。こうした徳源院の成り立ちも踏まえ、シンポジウムでは、京極氏はどこに住んでいたのか、徳源院の京極家墓所は誰によって営まれたのか、京極氏の寺院経営、発掘で見つかった能仁寺という寺院の性格という4つの観点から討論をおこなった。

まず、京極氏の居住地であるが、初代氏信は柏原に館を構え、その館が後に清瀧寺になったのではないかと考えられている。ところが高氏(道譽)は、犬上郡の勝楽寺に館を構えたのは何故かという疑問に対して、新谷和之氏(和歌山城郭調査研究会)はより湖南の守護である六角氏領国に近いところに館を構えることが重要であったとされた。

続いて、徳源院の京極氏墓所は丸亀藩二代高豊によって整備される以前に京極高次が墓所としたものではないかという中井の推論を、山口師は徳源院に所蔵されている京極氏歴代の木像のなかでも高次のものももっとも巨大なことから類推できるとし、これについては他の3人のパネラーからも支持されたようである。

京極氏の寺院経営については、京極氏やその家臣が山地を拠点とする寺院や修験に深く関わっていた

第33号

—特集：京極氏—

2011年3月25日

滋賀県米原市教育委員会

とし、坊院とも双務的關係にあることを藤岡英礼氏(栗東市文化体育振興事業団)は主張する。さらに京極氏は弥高寺や上平寺を城塞化するが自立的な家臣団は手つかずで、それを非求心的、あるいは一揆的とした。

ところで能仁寺遺跡(報告者/伊庭功氏・滋賀県文化財保護協会)については京極家七代高詮の墓所として営まれたようであるが、その前身として谷部には中世墓があったことが確認されている。宝篋印塔や、組み合わせ式の五輪塔が検出されていることより、庶民の墓ではなく、武士の墓所であったようである。今回は礎石建物の真ん中に墓所が営まれていると考えられていたが、残念ながら土坑からは蔵骨器は検出されなかった。守護の墓石や菩提寺を考えるうえで貴重な成果があげられた。なお、参道脇で検出された石垣はほぼ垂直に築かれ、石材も巨大なものが用いられており、15世紀初頭の石垣構造や、その後発達する石垣の祖形として重要であることが報告された。

最後にこうした京極氏の歴史遺産を今後活かしていくことが重要であるということでシンポジウムは終了した。



▲京極家墓所全景

京極高詮の菩提寺 能仁寺跡の調査（清滝）

調査の概要

清瀧寺遺跡と能仁寺遺跡は米原市清滝に所在する中世から近世の寺院遺跡で、今回の発掘調査は、京極氏の歴代当主の墓所がある清瀧寺徳源院の南に計画された能仁寺川通常砂防工事にさきだって実施しました。今回報告するのは、能仁寺谷（ノネジダニ）と呼ばれ、能仁寺跡と伝承されている場所（能仁寺遺跡）です。

能仁寺川は谷の上方（西半部）で南側を流れ、なかほどで谷を横断して北側に流れを変えます。谷奥からこの横断箇所までは、多数の五輪塔の残骸が出土し、2基の中世墓が残されていました。

能仁寺川横断箇所より下流側（東方）は、段差を境にして平坦地が2カ所にわかれ、上段からは能仁寺の中心部と考えられる基壇が検出されました。基壇の東辺からは山門跡とみられる遺構と、そこから東へ伸びる参道とこれに沿って築かれた大規模な石垣がみつかりました。また、基壇の南側では縦横に走る石組み溝と溜め枿が検出されました

遺構

中世墓 上流部では、三辺を石積みした長方形基壇の中世墓が2基発見されました。中世墓1では蔵骨器（古瀬戸壺）が出土しましたが、基壇に石塔は残されていませんでした。

中世墓2では基壇に五輪塔の地輪が5基据えられ（1基は転落）、これに載っていた部品5基分が付近に散乱していました。能仁寺川の土石流で倒壊したようです。5基のうち中央とその右隣（北隣）の基礎の下には細かく砕けた焼骨が埋葬されていました。

このほかにも、墓のために造成されたとみられる平坦地が北側斜面の裾にみられます。墓地を厚くおおう土砂からは200点以上の五輪塔・宝篋印塔の部品が出土しています。

焼土坑 T3では焼土や炭が詰まった土坑が2基みつかりました。穴の周囲が焼けていましたが、これらが何を焼いた跡なのかは明確ではありません。

基壇 下流部から見つかった基壇は南北約12.5m、東西は不明瞭ですが約14mの規模で、寺院の中心的な仏堂があった区画と考えられます。南辺は自然石による化粧積み、北辺は石組み溝で区画されています。正面にあたる東辺には、段差が切り出されていたと思われ、南辺と同様の化粧積みが施されていたと推察されますが、最近の改変により本来のようすは失われています。西辺の区画施設は不明です。

基壇内部からは掘立柱建物（一間×二間）がみつかりましたが、基壇とは方位がずれているので仏堂

の遺構ではないようで、次に述べる礎石と地覆石が仏堂の遺構と考えられます。

礎石・地覆石 北辺溝にそって4基の礎石とこれらをつなぐ地覆石が残されており、本堂の北辺部分の遺構と考えられます。このほかには礎石は見つからず、失われてしまったようです。残された礎石列の周囲には集石や焼土・焼けた壁材・少量の瓦がみられました。

木材埋設土坑 基壇西辺の南寄りにみつかった巨大な土坑には、長さ約2m、幅約0.2mの厚板を2枚並べて、方形基壇の方向にあわせて埋設されていました。板は側面にほぞ穴を穿ち、小板でハギ合わせています。板の東端には瀬戸焼の小さな香炉が置かれていました。板の下には土坑がさらに深く続いています。

池跡 基壇南西隅にはおよそ方形に玉石を敷き詰めた部分が見つかりました。これは基壇の一部にかけて掘り込まれた池の底に敷かれたものと思われます。池の汀は、後世の溝や木材埋設土坑などに切られて確かめられませんが、およそ南北4m、東西3mと考えられます。基壇上面からの深さは約30cmですが、基壇南辺の幅広の溝に連続していることから、深いものではなかったとみられます。

石組み溝と溜め枿 基壇の南辺石積みと対面の石列とのあいだにある幅広に掘りくぼめられた溝のさら



▲基壇跡



▲参道と石垣

に南側には、石組み溝が縦横に流れています。調査区南西に推定される取水口から基壇周囲に配水しているようです。石組み溝はある時期に導水ラインを作り替えており、新たに溜め枿を付設しています。**山門跡** 基壇の東辺を区画する段差の東約3mに山門跡らしい遺構がみつかりました。

小石を長さ1.5m、幅0.5mほどの帯状に積み上げたもので、南北2カ所に分かれており、土堀の残骸と考えられます。このうち南側のものには礎石と考えられる石が設置されています。礎石は後述の参道に付設された石垣の延長上にあること、基壇と参道が接する場所にあることから、山門の遺構と思われます。北側の門礎石は失われていますが、南側と同様に礎石があったとすると、門の間口は3m程度と考えられます。控え柱の跡は見当たらないので、2本の門柱を土堀で支えていたと思われます。

参道と石垣1 山門跡から東方へはゆるい傾斜で降りていきます。ここには山門の間口とほぼ同じ幅で、17mにわたって砂混じり粘土が貼られており、この南側には長さ14m以上、高さ1.5mの大規模な石垣1が築かれています。中心的仏堂があったと考えられる基壇と方位が一致し、山門跡を介して基壇につながることから、本堂へ通じる参道と考えられます。

石垣1の東端は調査対象地の外へ続き、南から張り出す尾根に突き当たるようです。参道はこの尾根を登って外へ抜けているのか、尾根の裾をめぐる石垣2にそって徳源院境内の方向へ抜けていたのかは明確ではありません。

参道側溝 参道の北側にそって長大な石組み溝がみつかりました。溝は参道上部では石垣1から約6mの間隔があります。南側の石組は能仁寺川にそって折れ曲がりながら東尾根の石垣2付近まで伸びています。この溝は基壇の北辺溝につながっていた可能性があります。

東尾根上の遺構 調査区東端にかかる尾根には、上述した西裾の石垣2のほか、これにほぼ直交する石列が検出されています。この石列の南側には参道と同様の踏みしめが段々を形成してみられることから、参道に続く階段であったかもしれません。

一昨年の調査では、東尾根上で建物跡になるらしい小穴群と、常滑焼の大甕を埋設した2基の土坑がみつかりました。

遺物

石塔 中世墓2に据えられた五輪塔5基のほか、石塔の部品が200点以上あり、平坦地の下斜面からまとまって出土したものが多くをしめます。ほとんどが五輪塔の水輪と空風輪で、地輪（基礎）・火輪（笠）がきわめて少ないことから、中世墓廃絶後にかたづけられたものと考えられま

す。宝篋印塔の基礎・笠・相輪部もわずかに出土しました。

宝篋印塔の基礎の一つは「貞治(三)年七月〇日」(1363年)の記年銘があり、南北朝時代から墓地として使用されていたことがうかがえます。

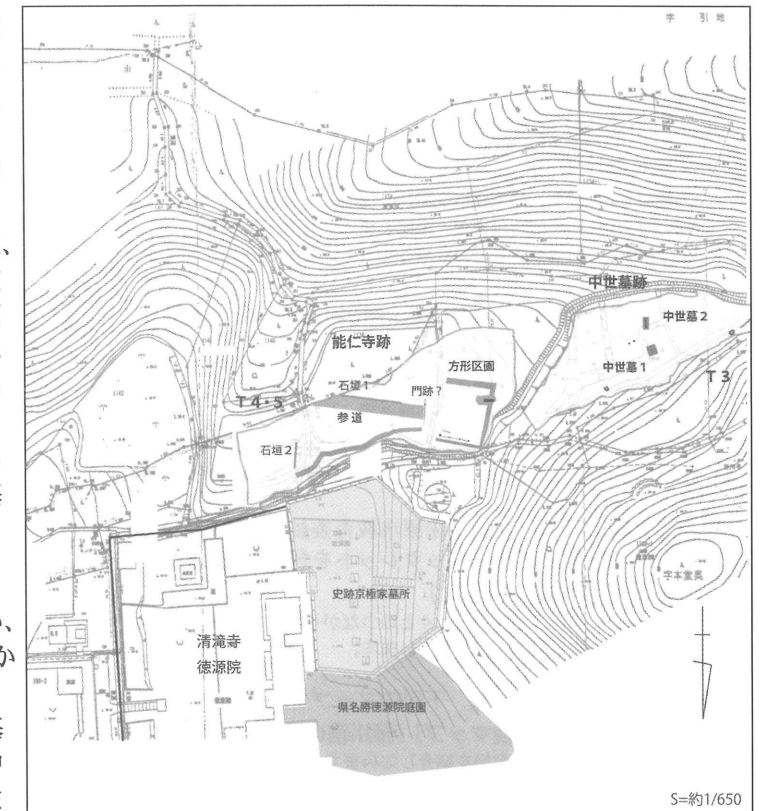
蔵骨器 中世墓1からは、火葬骨を納めた蔵骨器が出土しました。中世墓1から出土した古瀬戸鉄釉の広口壺のほか、灰釉三耳壺があります。

基壇付近出土遺物 木材埋設土坑に据えられた香炉など、古瀬戸陶器、香炉や火鉢に使用された瓦質土器、灯明皿、中国製磁器などが出土しています。基壇と参道付近ではすり鉢や甕といった日常雑器が少なく、基壇南側の石組み溝などでは比較的出土する傾向があり、場の機能の違いがうかがえそうです。

(伊庭 功「滋賀県埋蔵文化財センター研究会資料」より)



▲中世墓



▲能仁寺遺跡発掘調査概要図

S=約1/650